

St. Luke's International University Repository

CNS看護教育の課題と展望: CNS10年にあたって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野地, 有子, 柿川, 房子, 粟生田, 友子, Noji, Ariko, Kakigawa, Fusako, Aouda, Tomoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00015003

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



CNS 看護教育の課題と展望

— CNS10 年にあたって —

野 地 有 子¹⁾, 柿 川 房 子¹⁾, 栗生田 友 子¹⁾
直 成 洋 子¹⁾, 岡 村 典 子¹⁾, 長 瀬 亜 岐¹⁾
中 村 めぐみ²⁾, 宇佐美 しおり³⁾

1. はじめに

わが国の専門看護師制度 (CNS: Certified Nurse Specialist) は、1996 年より認定が開始され、この 10 年間に CNS 教育課程をもつ大学院および認定者が増加し、課題を残しながらもその活躍が期待されている。筆者らの大学院においても看護学修士課程において、専門看護師の教育がスタートしたところである。一方、専門看護師が活動を始めたこの 10 年間のアウトカム評価も待たれるところである (濱口, 2005)。CNS 教育課程の課題には、演習や実習があげられ、CNS の規定にある「複雑で解決困難な看護問題をもつ個人・家族や集団に対して、水準の高い看護ケアを効率よく提供するために、特定の専門看護分野の知識・技術を深めた者」の具体的な教育内容の精練と改善が求められている (水谷, 2004)。

専門看護師認定に関する看護系大学院修士課程修了生の実態調査 (加藤他, 2003) によれば、認定審査を受けるにあたり、問題や障害となっていることを解決するために実行していることや役立てていることに、大学教授からのスーパーバイズや情報収集があげられており、修了生へのフォローアップも大学の重要な使命であることがうかがえる。

米国においても、アドバンスドレベルの実践家教育が大学院修士課程において展開されており、近年は医療制度改革における影響から、社会的ニーズが高まり、CNS(Clinical Nurse Specialist) および NP(Nurse Practitioner) の教育が拡大してきている。米国では、全米看護師認定センターを通して、上級実践登録看護師 (APRN) が全国レベルの認定証として発行されている (ケーガン, 2003)。

日米の CNS の規定を比較すると、その役割は、実践家、教育者、コンサルタント、研究者であるという共通点がある反面、日本の専門看護師は調整者、米国の CNS は管理者であるとうたわれている点に違いがみられる (井

上, 2004)。2006 年 3 月に行ったサンディエゴ大学の大学院研究科長の Roth 教授へのヒアリングによれば、米国の CNS は、ミドルレベルの管理者として、個のケアと病棟マネジメントが任されているということであった。しかし、CNS は米国内でも施設によって役割が異なり、評価を一定基準化することは難しい現状がある。

2. 目的

CNS の役割拡大には内部・外部のコンセンサスが必要であり、特に看護師の間でのオープン・ディスカッションが求められている (アンダーウッド, 2003)。看護実践に基盤を置く本学会の設立時期に、わが国の専門看護師制度がスタートしたことも意義深く、本交流集会で、CNS10 年の節目の時期に、CNS 看護教育の課題と展望について、教育者および実践者からの提言を交えて意見交換し、今後の継続した討論の基盤づくりをすることを目的とした。

3. 交流集会の内容

1) CNS 教育の課題と展望 (コーディネータからの問題提議)

文献検討の結果、2006 年までの原著による CNS に関する日本語文献は総数で 463 件みられた。これに英文文献も加えて検討したところ、CNS の現状についてよく理解されていない、10 年間のアウトカム評価が必要、大学院修了生へのフォローアップの必要性、内部・外部のコンセンサスが必要、必要な臨床能力と教育内容のギャップがみられる (Fulton, 2006) 等があげられた。

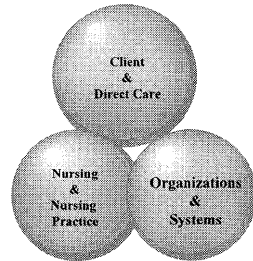
サンディエゴ大学の Roth 教授および CNS コース責任者の Instone 教授からのヒアリングによると、米国の CNS の変遷は表 1 のように示された。現在は CNS の再生の時期にあたり、NP と CNS を統合することなどを含めた上級実践看護教育が模索されている。Hardin 学部長によれば、上級実践看護教育においては、臨床看護

1) 新潟県立看護大学, 2) 聖路加国際病院, 3) 熊本大学医学部保健学科

表 1 米国の CNS の変遷

■	1954年	米国の初のCNS教育(精神)
■	1970年代	専門分野CNSの認定制度
■	1990年代	CNS低迷期
■	2000年～	CNS再生(患者の安全)

- Client & Direct Care
- Nurses & Nursing Practice
- Organizations & Systems
- How do we know if what we are doing makes a difference?



Ann Mayo, RN, PhD 2006

出典 Ann, Mayo(2006). Can we afford to ignore the measurement issues?, NACNS National Conference

図 1 CNS 実践の概念モデル CNS の3つの領域 (Sphere)

問題を明確にしてアプローチすることの必要性が述べられた。また、UCSF の Mayo 博士から、全米 CNS 学会について紹介を受け、CNS 実践の概念モデル (図 1) として CNS の3つの領域 (Sphere) があることが示された (Mayo, 2006)。

2) CNS 実践者からの指定発言

(中村めぐみ 聖路加国際病院)

がん看護 CNS 実践者として、また CNS 実習の指導者としての経験から、CNS に特に必要なものはアセスメント力、コミュニケーション力 (対人能力)、応用力、言語化能力をあげた。上級看護実践とは何か? について問い、大学院修了時のゴール設定および入学時の基礎的実践能力 (入試時の選択) が大切であることをあげた。実習指導にあたって感じていることとして、CNS 実習生は実習先の臨床現場においてスタッフナースと協働しながらケアの成果を感じさせることができた時、役割モデルとしてスタッフナースからの高い評価がみられることを紹介した。

3) CNS を希望するナースについての指定発言

(宇佐美しおり 熊本大学)

精神障害者の地域生活促進に関する包括型地域生活支援モデル (Assertive Community Treatment) の実践やケア困難な患者への直接ケアやコンサルテーションを通し、精神看護専門看護師には、患者を地域へ戻す力や他医療チームを動かし看護管理者を支援する力が CNS には求められていることを述べた。CNS を希望するナースは、臨床能力の開発を行うことが最も重要であり、組織の中で何がおこっているのかについてのグループのダイナミクスを読み取り、組織の動きの中で変革をおこしていく力を培う必要があることが重要であることをあげた。そのためにはスーパービジョンを受けられる仕組み

づくりが、焦眉の急であることをあげた。さらに専門看護師が政策を提言し、自分達で成果を示していく活動も重要であることを述べた。

4) オープン・ディスカッション

看護実践と看護研究をもう少し整理し、問題意識をもって、CNS は直接的に看護実践で成果をあげることの必要性が述べられた。これは、臨床問題の明確化が必要であり、臨床問題は、対象や時代とともに変化するものであり、高いアセスメント能力が求められるといえる。そのためにも、事象を深く認識することが必要であり、スーパービジョンの効果が期待されるので、CNS はスーパーバイザーを探すことが求められる。

CNS の認定に至るまでには、学部教育→臨床における卒後教育→大学院教育→臨床における大学院終了後の継続教育→CNS 認定といった経過をたどり、それぞれの場における看護教育の課題が関連してあるのではないだろうかということが述べられた。CNS 教育を考えると、基礎看護教育における実践能力や、卒後教育や継続教育との関係も浮き彫りにされた。

CNS になりたての人の問題として、どうやって自信をつけるのか? という問いかけもなされた。CNS コース修了生からの意見で、臨床に戻った時点で、同僚スタッフと言葉が通じないこと、近くに CNS の先輩がいないことがあげられた。CNS や CNS に関心のある仲間のネットワークが求められているといえる。

その他会場からは、参加者によるミネソタの実践例やハワイ大学のキャリアアップの例も紹介された。また、診療報酬に反映させることや、CNS 自身が実践能力を高める努力をすること、スーパービジョン制度、雇用促進、政策研究などの話題も提供された。

5) 参加者アンケートからみえる課題

交流集会の満足度と CNS についての自由記載を無記名にてアンケートをお願いしたところ、10 名の提出があった。所属は、教育 6 名、臨床 3 名、学生 1 名であった。自由記載の意見を以下に示す。

(1) CNS 教育の立場からの意見

- ① CNS 認定教育機関として立ち上げているところだが、看護系大学協議会の基準を満たそうとすると単位という考え方ではないことが明らかで、アウトカムが求められている。
- ② CNS の質も大切であるが、資質に集中すると数が増やせない。一方で大学教育の短縮化もみられるので、質がどうなるのかが問題である。
- ③ 大学院修了と同時に資格取得ではないので、大学院教育の門戸は広くして、CNS 認定試験でチェックすることができればよい。
- ④ 地方でよいモデルを確保しつつ、CNS コースを立ち上げ確立していく難しさを実感している。

(2) CNS 実践者および臨床の立場からの意見

- ① CNS に求められているものが、今回の交流集会

で明らかになった。少しでも近づけるように努力したい。

- ② 自分自身がCNSとして能力開発をしていかなければならない時期にあるため、有意義な会だった。
- ③ CNS自身の熱意が、問われていると感じた。
- ④ CNSを受け入れる側として、教えていく材料をいただいた。

(3)ネットワークなどその他

- ① 各領域のCNS交流の場として有用であった。今後、地方でもCNSが増えてくるため、全国的なネットワークが必要である。
- ② ネットワークが、活発になることを期待している。
- ③ 交流集会は、もう少し時間があるとよかった。(実施時間は75分であった)
- ④ 領域によっても抱えている課題が異なること、多くの問題がまだあることを実感している。
- ⑤ 実力あるナースの存在が、医学、患者の健康福祉に役立つことをアピールして欲しいと思っている。

6) まとめ

CNS看護教育の課題と展望について、大学院教育および継続教育を中心に意見交換を行ったところ、参加者25名、コーディネータ6名、指定発言者2名の合計33名の参加を得た。

指定発言者のCNSからは、CNS院生およびCNSを希望するナースの基礎的実践能力について、スタート時点でのより高い能力を求める点があげられた。意見交換にもあったように、CNSも新人から熟練者への段階的成長があることが考えられるので、この成長のプロセスとCNS看護教育が連動して、環境を整備しながら発展することが期待される。また、大学院修了時のゴール設定や臨床看護問題の明確化、スーパービジョン体制など、CNS実践者を交えて幅広く討議され、今後のネットワー

クづくりの発展が期待された。本交流集会後に有志によるネットワークが立ち上がり、情報交換が開始されている。

本研究は、平成18年度新潟県立看護大学学長特別研究費の助成により実施した。

参考文献

- Ann, Mayo(2006). Can we afford to ignore the measurement issues?, NACNS National Conference
- 濱口恵子(2005). 専門看護師の現状と課題, 臨床看護 31(11): 1588-1592.
- 井上郁(2004). 日本における老人看護専門看護師への期待, 老年看護学8(2): 18-22.
- Janet, S. Fulton(2006). In Search of Advanced Clinical Nurse Specialist education, *Clinical Nurse Specialist* 20(3):114-115.
- 加藤令子, 小川理恵, 小山田恭子, 中野綾美(2003). 専門看護師認定に関する看護系大学院修士課程修了生への実態調査. 看護55(7). 150-160. 2003.
- 水谷信子(2005). 老人看護専門看護師の育成をめざす教育課程の展開と課題. 老年看護学8(2): 4-9.
- National Association of Clinical Nurse Specialists, <http://www.nacns.org/>
- パトリシア・R・アンダーウッド(2003). ヘルスケア変化の一局面としての看護の役割拡大: アメリカからの観察, インターナショナルナーシングレビュー26(3): 45-45.
- サラ・H・ケーガン(2003). アメリカの老人CNSの役割, インターナショナルナーシングレビュー26(3). 65-70.